



## 分科会 13 慢性疾患患者へのファーマシューティカル・ケアを考える

10月8日(月・祝) 10:30～13:00 第4会場(アクトシティ浜松 コンgressセンター 4F 43+44会議室)

W-13-01

### 基調講演 慢性腎臓病患者に対するファーマシューティカル・ケア

ひらた すみお  
平田 純生

熊本大学薬学部附属育薬フロンティアセンター・臨床薬理学分野

#### 【薬剤師の役割】

わが国の高血圧患者数は3,000万人、メタボリックシンドロームは1,960万人、糖尿病と慢性腎臓病各々、1,300万人ずつ存在し、これらの疾患は相互にオーバーラップしている。その中で果たす薬剤師の職務はなんなのであろうか？「迅速で正確な調剤、薬剤の供給、おどりの薬歴管理」だけが薬剤師の仕事の本分ではなく、「有効かつ安全で、目の前の患者さんに配慮した最適な薬物療法を提供する人」と定義したい。服薬率を上げるためのプロの服薬指導能力、腎機能に応じた適正投与量になっているか、相互作用による有害事象を起こさせない薬物療法になっているか、などの鑑査能力、慢性疾患患者の予後を改善し、QOLを改善するための薬物適正使用の積極的推進など、薬剤師がやるべきことはたくさんある。本講演ではその一部について解説したい。

#### 【患者を暗くさせるような服薬指導はやめよう】

服薬指導では患者の側に立って傾聴し、分かりやすいことばで病態のことをしっかり教えることによって薬を服用する必要性が理解できる。これは服薬指導の基本と言える。しかし透析導入することが決まると、ほとんどの患者が暗くなる。たとえば糖尿病が原因で透析導入する患者に対しては、透析を週3回欠かさずしなければならぬし、多くの患者が網膜症で失明し、心筋梗塞・脳卒中・心不全などの心血管病変によって突然死する可能性が高くなる。軽い足の傷でも痛みを感じなくなって、潰瘍ができると、全身の細菌感染を避けるために、脚を切断し、義足か車椅子生活・・・、という説明をすれば、いくら正しいことを言っても鬱になるか、自暴自棄になるであろう。

演者はいつも明るい服薬指導を心掛けている。「透析導入すると、食欲不振や全身倦怠感などの尿毒症症状が1週間くらいで消え、『こんなに楽になるのなら、早めに透析すればよかった』という患者さんもいます。厳しかった食事制限も透析で老廃物や、カリウム、リンがよく抜けますので、今までに比べてずいぶん楽になります。糖尿病の方でも自己管理さえよければ、透析導入して10年たってもバリバリ仕事をしながら透析をされている方もいらっしゃいます。だから自己管理は大切です。」という話をする。糖尿病が原疾患の透析患者であれば10年生存率は25%以下だが、元気で働いている人は居るし、決まって自己管理の良い方々である。ネガティブな服薬指導は、かえって自己管理を悪化させるような気がしてならない。

#### 【コンプライアンス→アドヒアランス→コンコーダンスの普及が慢性疾患患者数を減少させる？】

糖尿病や高血圧も異常値を指摘された段階ではほとんどが無症状である。慢性腎臓病（CKD）も微量アルブミンが検出された段階では無症状である。しかしそのまま放置しておくと、心筋梗塞・脳卒中・心不全などの心血管病変による死亡率が急上昇するとともに、腎機能が徐々に低下し、最終的に透析療法か腎移植が必要な深刻な疾患である。でも、これをそのまま伝えることはいかがなものだろうか。

たとえば会社の健康診断で検尿によって蛋白尿が認められ、内科受診を勧められて、やはり蛋白尿が検出されればCKDと診断される。この時に、アンジオテンシン受容体拮抗薬（ARB）を1日1回1錠、処方された患者が、初めて保険薬局に処方箋を持って来訪したとしよう。薬剤師が薬剤情報提供用紙を指さしながら「血圧を下げる薬が1日1錠、処方されていますね」と説明すると「俺の血圧は上が120で下が60だよ。なんで血圧を下げる薬を飲まなくちゃいけないんだ」と怒って帰り、何の症状もないから、ずっと受診しないこともあるかもしれない。

この時もCKDの病態を踏まえた、明るい服薬指導が大切だ。「軽度の蛋白尿が早期発見できてよかったですね。これからの治療、頑張りましょう！この錠剤を1日1錠、飲むだけで蛋白尿を少なくできます。蛋白尿が減れば腎臓が悪くなるのを防げます。しかもこの薬は、心筋梗塞や脳卒中になるのも防ぐ作用もあります。月に1回必ず受診すれば、一病息災で、かえって長生きできるかもしれませんね。」と説明すれば、忘れずに、毎月受診をしてくれるかもしれない。「きちんと薬を飲んでもらうこと」はコンプライアンス（患者を従わせる）ではなくアドヒアランス（患者自身が主体的に服薬を守る）に代わり、さらに、CKDのような慢性疾患ではコンコーダンス（患者をパートナーとして服薬の支援をする）という概念が普及できればと思う。慢性疾患のチーム医療の中で薬剤師による適切な服薬指導が広まり、そのチーム医療の輪が円滑に動けば、CKDも糖尿病も初回の指導によって、数年後には原疾患の進行が止まり、心血管病変が減少し、10年後には透析患者が激減するのも夢ではない。そのキーマンの役割をするのが保険薬局薬剤師ではないかと考える。